

福生・七夕祭り

坂本丁次

昭和二十六年、福生は人口一万五千人の町だった。町の商店は、八王子、立川、青梅の商店街と比較すると、かなり見劣りしていた。客の多くは、立川などへ流れるため、「何とか福生にも客を誘致したい」―商店主は真剣に考えた。福生を「ふっさ」と正しく呼ぶ人は少なく、「地名を正確に売り込み、親しまれる商店街にするには」―あれこれと論議したが、決定打は出なかった。

たまたま、町役場職員に、七夕で名高い仙台に住んだことのある佐藤三郎さんがいた。仙台は太平洋戦争末期に大空襲にあい、一面焼け野原になった。住民の多くは、終戦後も焼けたトタンを集めてバラックを建てたり、防空ごう住まいの人もいた。ところが、二十一年八月の七夕になると、バラックの家や、ベニヤ張

りの店の前に大きな竹が立ち、短冊や吹き流し、くす玉が垂れ下がっていた。住民も元氣を取り戻し、街も明るくなったように感じたという。

佐藤さんのアドバイスで、二十六年七月六日から三日間、第一回の福生七夕祭りが始まった。物資が乏しい時代、竹に色とりどりの短冊や、赤や青のモールが飾り付けられたが、既成品ばかりで、華やかさはなかった。それでも、昼間から見物客がきて、夜はさらににぎわった。

翌年、町全域の商店街が七夕祭りに参加、飾りも既成品ばかりでなく、手作りのものも現われ、竹飾りコンクールも始まった。第三回は青梅線に七夕臨時電車も運転された。

「伝統の仙台、竹飾りの平塚、壁面飾りの福生」といわれる。福生の七夕祭り

は、商店の壁面に足場を組んで、飾りものを取り付けるのが特徴。三十年代に入り、この壁面飾りが登場、七夕祭りは豪華の一途をたどった。

商店は数カ月前から飾りのプランを練り、関係者以外には秘密にする。町は商店振興と観光客誘致にと、七夕祭り実行委を組織、マンネリ化を防ごうと、祭り全体の手直しをした。一般から七夕の論文を募集、飾り付けにテーマを設けたりした。

三十五年の第十回、歌舞伎の名場面を再現したりして、飾り付けはより豪華になった。行事は街頭に集中させることにし、ミス東京、米軍、小学生鼓笛隊パレードも登場。七夕寄席、歌謡ショーと、福生一小校庭特設ステージの催しも華やかさを増した。

祭り実行委のメンバーは、仙台、平塚の七夕祭り、山形の花笠踊り、徳島の阿波踊りと、各地の夏の伝統行事を見て回った。七夕祭りを町全体の祭りにし、多くの住民に参加してもらおうと、祭りに踊りを取り入れることにした。四十一年、「福生音頭」の制作に乗り出し、歌詞を

全国から募集、八十一編の応募があった。審査の結果、北区の池野美千留さんが入選、これを参考に、西沢爽さんが新しく作詞するため、福生を取材にきた。

私は、西沢さんと一日町内を回り、歌詞に「多摩」と「鉄路はたすきがけ」の二つを入れてほしいと話した。そこで、音頭の二番に「多摩の岸辺にゃやさしい桜よ」、四番に「結ぶ鉄路はたすきがけ」との詩が入った。「多摩」は、語呂がよく、親しみやすい。「鉄路はたすきがけ」は、福生には国鉄八高、青梅、五日市の三線が、たすきをかけたときのように、走っているという意味。作曲はすでに病床にあった万城目正、歌手は新人の都はるみ、杉良太郎を起用した。

音頭は街頭で踊るように振り付けたので、前進はするが、バックはしない。四十一年、福生音頭パレードとして、七夕祭りに登場した。平塚は福生音頭を聴き、四十五年、都はるみの歌で「七夕おどり」を制作、パレードを始めた。

福生七夕祭りは四十三年、梅雨を避け、八月上旬に移った。前年まで平塚と同じ七月初めに行われてきたが、まだ梅雨が

明けず、雨の日が多い。この年は、四日間の祭りで、初日だけが晴れ、あとの三日は大雨が降った。商店主や住民にアンケート調査した結果、仙台と同じ八月になった。

四十八年ごろには、アメリカから観光団もやってくるほどにぎわいだった。だが、肝心の商店振興は観光の陰に隠れてしまい、商店主の中には「せっかく五十万から百万円もの金をかけて飾り付けをしても、あまり効果がない」と、こぼす者も多くなった。各地に知れ渡ったこの七夕は、商店街の宣伝には絶好なので、観光面だけでなく、商店の振興にも大いに利用することにした。

五十年の第二十五回、祭りのハイライトとして「ミス福生コンテスト」が始まり、第二十八回、出場者の応募範囲を広げ「ミス七夕コンテスト」と名称を変えた。毎年、ミス一人、準ミス二人の計三人を選び、三人は市の公式行事に花を添えるほか、うち一人はミス福生となり、ミス東京コンテスト決選大会に福生市代表として出場している。七夕祭りと美女選びは、切れない行事になった。

米空軍横田基地は福生市の三分の一を占める。近ごろは米兵やその夫人たちも、七夕祭りに参加して人気を呼んでいる。米兵がハッピー、豆しぼり姿でみこしをかつぎ、将校夫人でつくる「横田夫人友好会」が民踊パレードに参加、七夕祭りを通じての日米親善は、年ごとに盛んになっている。

東京の夏の風物詩「福生七夕祭り」は、観光事業としても、すっかり定着、三十六回を重ねた。マンネリ化の声がないでもないが、商店主は「テーマを考えるのが大変」と言いながら、飾り続ける。七夕最終日には花火が打ち上げられ、スターマインが夜空を焦がす。夏の夜空はロマンがいっぱい、見物客は宇宙の神秘や美に酔いしれる。

(さかもと・ていじ 東京新聞社会部記者
武蔵野台在住)